

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 138 号

平成25年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三  
電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（17）

第60講 ロマ書大観

ロマ書・5つの感想

第1の感想 キリスト教の救いは、人生に力強い

感想の第1は、キリスト教の救いというものが、いかに人生に力強いものであるかということであります。キリスト教の救いを言い表わすのに、ヨハネ伝では、イエスがニコデモとお話しになった時、「新たに生まれる」という言葉をお使いになりました。また、その時、イエスは「神の国に入る」という言葉もお使いになりました。またヨハネ自身は、この救いのことを「神の子となる」という言葉で述べております。そして、パウロは、ロマ書では「信仰によって義とされる」と述べて、「義とされる」という言葉を使っています。イエスのお言葉でいえば、新生、すなわち、新たに生まれる、あるいは神の国にはいる、またヨハネの言葉で言えば、神の子となる、また、パ

ウロの言葉で言えば、信仰によって義とされると、さまざまな言葉が使われておりますが、これらは4つとも「救い」を表わしている言葉であって、同じ意味であります。その内容は、神から永遠不滅の生命を頂くということであります。そして、この救い、すなわち、永遠の生命というものが、いかに人生に凄い力を現わすものであるかということ、ロマ書全16章を用いて、パウロは展開致しました。

この「力」という文字に、私は深い感銘を覚えます。ドゥナミス(力)とパウロは言いましたが、ダイナマイトという字もこれに由来しています。このロマ書の初めにおいて、パウロは、私がこの手紙を書くのは、君たちローマの信者に私の霊の賜物を分け与えて、君たちを力づけるためであると言いました。またこのロマ書の終わりでは、「あなたがたを力づけることのできるかた、すなわち、唯一の知恵深き神に、イエス・キリストにより、栄光が永遠より永遠にあるように」と言い、「力づける」という言葉でロマ書を終っているのです。すなわち、ロマ書は、「力」でもって始まり、「力」でもって終わっている。私は、そのことをまず感じます。 (P. 452)

## 第2の感想(1) 永遠の生命の展開の姿

パウロは、永遠の生命というものは、こういうふうな5つの霊的真理(第17講参照)として展開してくると述べて、明瞭に説明しました。すなわち、先ず、自分は滅ぶべき罪人であると信仰せしめられ(万人罪人の信仰)、それにもかかわらず、キリストの贖いによって義とされて永遠不滅の生命を頂き(贖罪の信仰)、神の子とされて復活するという望みを頂く(復活の信仰)。すなわち、心では神の子とされたと思い、そしてこの世においては神に護られて、そして天国へ往って復活する、神の子とされるということと、復活するという望みが心の状態であります。このことが1章から8章までに説明されています。そして、その心の状態が口に現われてくると、「イエスは主である」と告白するようになる。すなわち、口では、「我が主イエスよ」と言い表すこととなります。これが9章から11章までの内容であります。そして、その告白が我々の身に行かないとして現れてきますと、毎日、日々与えられる自分の義務、すなわち、神の意思をなすこととなります。これを「献身」という。…その中心は、復活の望みです。これがパウロが展開した永遠の生命の説明であります。

(P. 453)

## 第2の感想(2) ロマ書の目的、復活の望み

これほど明瞭に、ここに山あり、ここに河あり、というようにはっきりと永遠の生命を説明した人はどこにおりますか。パウロの前にパウロなく、パウロの後にパウロはない！ オーガスチンやルッターといっても、パウロの弟子であり、パウロの救いの跡をたどった (nachdenken) 人々に過ぎません。繰り返しそれを体験したに過ぎません。

この永遠の生命の展開においては、復活の望みが中心となります。ですから、パウロは、ロマ書の第8章で復活について述べた。カルビンも、パウロがああ長いコリント前書を書いた目的は、復活を説明するため、我々に復活の望みを得させるためであったと言いました。しかしながら、コリント前書のみならずロマ書もまた、この復活の望みを我々に得させるために書かれたものであります。復活が救いの頂点でありますから、ロマ書でもコリント前書でも、その内容は同じことです。 (P. 454)

第2の感想(3) 復活の望みが、日々の行ないの励まし  
復活の望み、すなわち、我々が復活する者となるという望み、永遠不滅の生命を頂くということ、これが救いの中心でありますから、このロマ書本文の最後の15章13節で、「聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように」と書いて、パウロはロマ書の本文を閉じたわけであります。こと程左様に、この復活の望みが中心になっています。そしてまた、この復活の望みが、我々の日々の行ないの励ましになります。ですから、パウロの山上の垂訓ともいべきロマ書13章の終り、聖オーガスチンをもって世界に大感化を与えたあの13章の終りにおいて、「夜はふけ、日が近づいている」、すなわち、パウロは、復活の日は近いことを述べて、復活を信じつつ、日々の道徳生活を送るよう勧めているわけであります。

(P. 455)

### 第3の感想 (1) 「信仰」は、意思の働き

私は、この救いというものは、神の知恵からきていることを感じます。パウロは、ロマ書の最後の祈りにおいて、知恵深き神に栄光あれと述べて、「知恵」という文字を使っています。この救い、すなわち、福音というものは、神が深い知恵を用いてお考えになった、我々の滅ぶべき人間を救う方法であります。すなわち、神は神の愛をもって、イエス・キリストをこの世に降して、この永遠の生命を我々罪人にお与えになった。これは、神の知恵から出た神の恵みであります。これは神の知恵であって恵みでありますから、我々人間の頭の中の考えや理性を超えています。我々は、これを信じて受けるより手がない。方法は、それを本当として受けるだけです。…

「信仰」というのは、それを本当とする、すなわち、本当として受けることであります。これは理性や感情とは違う一つの精神の働きと見て宜しい。意思の働きと見て宜しい。本当とするとはどういうことかと言えば、我々の感情がそれに賛成しなくても、また我々の知性がそれを理解できなくとも、意思の働きによって、それを本当として受け取ることであります。そしてこの本当とすることは、我々の意思の力によって可能です。

(P. 455)

### 第3の感想(2) 諸君の頭脳はどれほどすぐれていますか

この信仰の力というものを、現代人は失いつつあります。19世紀以来、科学が急速に発達致しまして、我々に科学万能という妄想が起こってきた。また例のマルクス以来の唯物史観、唯物思想がこの世界を風靡しまして、目に見えないものの真実を理解することができないようになってきました。人類のこの科学万能の妄想と唯物万能の迷信、これらは二つとも、妄想あるいは迷信と言って宜しい。そういった妄想や迷信のために、信仰という力を人類は失いつつあります。私は、そういう感想を持ちます。人間の誠実という精神、本当としてそれに従うというこの意思の力が、無くなりつつあります。信仰と言えば、何か頭の低級な者が、あるいは何か愚夫愚婦がやるもののように思っている人がありますが、それは間違いであります。サー・アイザック・ニュートンやパスカルといった世界最大の科学的頭脳の持ち主が信じているのです。彼らに比べて、諸君の頭脳はどれほど優れておりますか。 (P. 456)

### 第3の感想(3) 現代人は、信仰の能力を喪失しつつある

この神の恵みを信じることによって、この恵みが自分のものとなる。このことを、パウロは、ロマ書において、「信仰より信仰に至る」と表現しました。私は、現代人に、信仰という能力を鍛錬することを教える必要があると思います。信仰の能力は、何でもそうですが、使わなかったら無くなります。現代人は、信仰の能力を喪失しつつあります。科学万能の妄想、迷信の信者となりつつあります。この信仰を持って神の知恵を受け取るということ、これはなにもキリスト教の真理だけに限りません。この人生において、自分より高い知恵を受け取るには、この信仰という方法しかありません。この人生において、本当に知恵ある人が自分の判断に苦しんで、自分より上の知恵を持っている人、すなわち、先生や先輩に聴いて、その先生や先輩の知恵に信じ従って、それを自分の知恵にしたという例を、私はたくさん知っています。この頃の人間は、この従うという精神を失いつつあります。私は、世界の動乱はそこに原因していると見ます。知者の知恵を聴くという謙遜さがなくなった。これはキリスト教だけの問題ではありません。信仰の能力を喪失するということは、人類の重大問題であります。(P. 457)



## 第4の感想 万人に可能

この神の知恵を、我々は信仰によって受け取るのですから、これは万人に可能です。誰でも往ける、ということです。ロマ書を読んで、私はそういう感想を持ちます。誰にでも可能です。説明を要しません。第4の感想は、説明は簡単ですがけれども、意味は重い。諸君、これを自分に当てはめて下さい。 (P. 457)

## 第5の感想 福音は、知っている人から伝わる

この永遠不滅の貴い生命を、人間は欲しくないということであり  
ます。…我々人類は、永遠の生命を欲しくない。我々は、これに無関  
心です。「猫に鯉節」と言いますが、我々は、この世のものが欲しい。  
健康が欲しい、知力が欲しい、肉の能力が欲しい。しかし、永遠の  
生命は欲しくないのです。ここに、キリスト教を学ぶ困難がありま  
す。我々は、この永遠の生命の貴さを知らないから、それを欲しく  
ないのです。もしこの永遠の生命というものを知ったならば、きっ  
と欲しいに違いない。これは、知らしめてもらう必要があります。  
そして、この永遠の生命というものは、これを知っている人だけが  
説明できる。無い袖は振れません。これは、知っている人からのみ、  
聴ける教えです。諸君！ パウロから直接聴いて下さい。ロマ書か  
ら聴いて下さい。二流、三流の教師から聞くことをやめたまえ！ そ  
の聴き方は、信仰をもって聴く。私は、福音というものは、それを  
知っている人から知っている人に伝わる者だと信じます。福音を知  
らない人からは福音は伝わりません。論より証拠、事実、現代の教  
会はどうですか。 (P. 458)

## ロマ書は世界最大の書

以上、5つのことについて、私の感想を述べました。これが、私がロマ書を読んで感じたことでもあります。本日の私の感想は、いずれをとりましても重い一カ条であります。諸君！ 注意して下さい。

私は、内村先生から聴いて、この救いが少しく分かりました。1921年、22年の2年間聞きましたが、それから50年が経ちました。私はロマ書の講義を2回致しましたが、さらに、内村先生から聴いて60年目に当たる1981年、82年には、もし健康が許されれば、第3回目のロマ書の講義をさせて頂きたいと思っています。当教会の兄弟姉妹たち、どうか私のこのわがまを許して頂きたい。

ロマ書は世界最大の書である、と或る学者は申しました。世界最大の書であるかどうかは私は知りませんが、私は新約聖書をこの25年間に少しく勉強させて頂いて、ロマ書は新約聖書の中で最も大切な書であると信じます。もし新約聖書というものが人類が持つ最大の書であるとすれば、私は、ロマ書は人類が持つ最大の書であると確信します。私のこの確信が正しいか、誤りであるかは、人類の歴史が証明します。 (P. 458)